

黒ケータイの悪夢

kurokeitai

NO

akumu

mikatuki98

俺は彼女と別れた翌日、幸か不幸か仕事が休みだったので今まで使っていた黒い携帯電話を買い換えようと家を出た。思えばこの黒い携帯電話を使うようになってからろくなことが無かった。そもそも彼女と出逢ったのもこの携帯電話を買った後のことだ。

まず俺と彼女が出会ったのがこの携帯電話で登録したコミュニティーサイトだった。出会い系サイトでは無いが、メル友になって遣り取りをして行くうちに何となく会おうかということになった。よく下心のある男に女の子が騙されるとか聞くが、正直、俺の方が内心ビビっていた。

『会ったりしてホントに大丈夫なのか？ 俺……』

しかし実際会ってみると相手はごく普通の女の子で、いや、子と言うには少し抵抗がある年齢だったが、俺としてはチャラチャラ・キャピキャピした犯罪にひっかりそうな危うい年齢の子よりは、ジックリと落ち着いて話せるむしろ大人っぽい女性の方がよかったし、何よりもラッキーだったのは意外と美人だった。それに初めて会った時の会話もメールでの延長のように弾んだしこのまま交際が続けられるかもしれない、とその時は思った。

ところが二度目のデートの時、彼女は帰り間際になって新幹線代が無いと言い出した。俺は神戸で彼女は名古屋だったのだが、初めて会った時は俺が名古屋まで出向いたので、今度は彼女に京都まで来てもらっていた。しかし来るからにはちゃんと往復の切符も買っているだろうと思っていたし、帰りに買うにしてもまさか足りない！ とアッサリ言うとは思ってもみなかった。それどころか、俺が今日の食事代や諸々の経費を殆ど払ってやっていたのに、お礼も言わなければすまなそうな素振りも無い。もう完全に、彼女は俺の懐を当てにして来た証拠だ。それでも一応俺は男だし、誘ったからには無碍にも出来ない。俺は自分の切符代を確保すると、なけなしの金をさらばいて彼女の帰りの新幹線代を貸してやった。そう、返してくれという条件で貸した。

その後、お互いに遠距離ということもあって2ヶ月ほど会えないでいた。それでもその間、携帯メールで他愛もない会話の遣り取りをしていたので特に寂しいという思いも俺にはなかった。むしろ今度いつ会う？ と彼女に言われる度に、二度目のデートでの悪夢を思い出してどうも気が乗らない。何せ貸した金も返そうとする気配が全く無いのだ。ふと俺は、そんなに彼女のことが好きという訳ではないんだろうな……と思った。

そんなある日、彼女が会社のパソコンからメールして来た。

<ヒロシ大変！今朝、出勤する途中で携帯をどっかに落としちゃったみたいなの～>

みたいなの～じゃなくて、彼女はホントに落としてしまっていた。俺は直ぐに携帯電話会社に連絡して使用停止の依頼をするように指示し、兎に角、どこら辺で落としたのか良く考えて思い出すようにとメールした。

ところが翌日、俺の携帯電話に彼女のアドレスでメールが届いた。

<君って、リサさんのこと好きなの？>

この内容を読んだ時、彼女の携帯を拾ったヤツからのメールだと直感で分かった。が、俺は返信はしない。その代わりに、彼女が会社で見ているだろうパソコンへ確認のメールを送った。

<ケータイは見つかったのか？>

<それがまだなのぉ～(;_ _)>

<ちゃんとケータイの会社に紛失届けしておいたろうな？>

<ううん。未だだよ♪ でもケータイならセキュリティかけてるし、リサ意外の人は使えない筈だよ(*^^)v>

<大丈夫じゃない！ 今すぐ連絡しろ！ 丶(▼皿▼丶) >

これで完全にリサの携帯を拾ったヤツの悪戯メールだと判明した。すると、リサの落とした携帯電話から直ぐまた次のメールが来た。

<リサさんとラブラブなんだねえ～ 何処が好きなの？>

文章の口調からして、相手は女のように。しかし俺は相手の挑発に乗って返信などしない。もしかしたら、俺を誘い出そうとしているのかもしれない。女の口調でメールしておいて、実際行ってみたら男だという可能性もある。しかし相手も馬鹿だなと思えてきた。そうやって誘い出して会った俺が、逆に悪いヤツだったらどうするのだ？ 下手すると命だって危ういじゃないか。

そんなことを考えていると相手も何かに気がついたのか、それからプツリとメールが途絶えた。

「.....たく、リサのやつ！ ドジを踏んでくれるよ」

結局、リサの落とした携帯電話は出て来ないままだった。

彼女が携帯電話を紛失してしまってから本人は金欠なのか、会社の友人からお古の携帯電話を貰ってそれを使っている、というメールをよこして来た。会社関係の情報が入っているから助かったと喜んでいるようだったが、俺はどうしても素直には喜べない。

「リサ！ そのケータイ、古いって大丈夫か？ ちゃんと機能するのか？ てか、もう落とすなよ！」

「ラジャ！ 新しいの買うまでコレ使ってるからヨロシクね。メール待ってまーす」

どうも深刻さの無いリサの浮かれ口調が気になるが、とりあえず前の携帯電話は使用停止になったらしいので一先ず安心だな、と俺は思っていた。

しかし安堵も束の間、彼女の携帯電話は再び俺に災いを呼び込んで来た。

<ヒロシさん、お元気ですか？ 会社の友人からもらったケータイはやっぱり古過ぎてすぐに壊れちゃました(≧▽≦;) なので今日、修理に出しました。しばらく携帯からメール出来ないけど、何かあったら会社のパソコンへメールしてね(^_-)-☆>

ヒロシさん、お元気ですか？ なんて書き出しだから何か嫌な予感がしたが、やっぱり早速修理だと言う。

「ふん、そうだろうと思ってたよ」

嫌な予感はそれだけでは無かった。翌日、俺が会社の営業で回っている時、携帯電話が鳴ったので着信を見ると、会社の友人から貰ったが直ぐに壊れて修理を出しているという彼女の携帯番号なのだ。そう、掛かって来る筈のない彼女の携帯電話の番号から掛けられている電話が今、鳴っているのだ。俺は恐る恐る出てみた。

「はい..... もしもし」

すると、電話は直ぐに切れた。俺の声を確かめたようなタイミングで切れた。

「.....誰だ？」

不審に思いながら歩いていると再び俺の携帯電話が鳴った。会社からだといけないので直ぐに確認をする。また彼女の番号だ。俺はもう一度出てみることにした。

「……」

無言の俺に今度は相手も直ぐに電話を切った。

「誰だ！お前！？」

腹が立って来た俺の脳裏に閃いたのは、リサの昨日のメールだった。あいつは携帯電話を修理に出したと言って来た。と言うことは、携帯電話会社にその携帯は今、預けられているということだ。

「まさか……」

考えられるのは、その修理に出した携帯電話会社の社員が掛けているということ。更には修理をしている人間の可能性もある。しかし、客の携帯電話の個人情報勝手に覗き見る、しかも使うなどということはあってはならないことだ。が、現実、電話は掛かって来た。しかも一度ならず二度までも。と思っているところへ、三度めの電話が鳴った。俺はもう出なかった。出て俺に怒鳴れとでも言うのか？

俺はその夜、昼間にあったことを彼女のパソコンへメールしておいた。すると直ぐにパソコンから返信が入って来た。

<Σ(□□;)ウッソ～ エェ～ 修理する人が掛けて来たのかなぁ～ エェ～ てことは、リサの顔も全部見られたのかなぁ～(*´▽`*)>

彼女の相変わらずの反応に、俺はピンと来た。つまり携帯電話に入っていた彼女の写真を見て、恋人らしい俺の存在を確かめたかったのだ。誰が見ても美人だと思えるリサに反応する男は多い。実際デート中には殆どの男がリサを見て振り返った。その時は俺も少しは鼻も高かったが、あくまでも顔の良さと性格の良さは比例しない。他のヤツは知らないが、少なくとも俺の価値観では彼女の性格はもう勘弁してくれ！ という感じだ。

俺はそれから半年後に彼女と別れた。別れた原因は、何もこの二つの携帯電話事件だけではなかった。その後のデートでの金銭感覚のルーズさに加え、メールだけの会話では分からなかった彼女の本性が次々と現われて来たからだ。世の中にはツンデレが可愛いと言う男も居るようだが、俺は願ひ下げだ。そして忌まわしいこの黒い携帯電話も願ひ下げだ。

俺はそれまで使っていた黒の携帯電話を買い換えるのを期に、今まで契約していた△△会社を解約して〇〇会社に切り替えた。そう言えばあの頃、彼女が言っていた。

「〇〇って名前がなんかブタみたいで嫌なのよねえ～ ヒロシのケータイは黒だから黒豚じゃん！」

俺は彼女が嫌だと言っていた〇〇を敢えて選んだ訳ではない。唯、ずっと欲しかった機種が〇〇にあっただけの話だ。そう、元々俺と彼女は好みが全く合わなかったのだ。

俺は赤い携帯電話を選んだ。赤は俺のラッキーカラーだ。

「ふん！ 今度こそ俺は<幸運の女神>にこの赤ケータイで出逢うのだ！！」 了